

現代と教化

—教化の現場に在つて想うこと—

長谷川正徳

教団の実践である教化を考へる場合、教化の場である現代とは何かをまつ考へてみなければなるまい。

わが宗団においては、宗義の現代化ということが布教の現場から強く要請され、この要請に應へるものとして「宗義大綱」が諸機関の討議を経て発表された。これが完結的なものであるか否かは別として、これを基準にして、教化伝道を行う場合、なおかつ現場の教師は、よく現代というものの諸特色についてこれを認識してかからねばならぬだろう。

そして、現代社会が宗教とどうかかわりあつてゆくのかわれわれの教化が現代にあつてどう評価され、価値づけられてゆくのか等を究明してゆくものでなければならぬ。

現代がさまざまなテクノロジー（科学技術）の時代であ

ること、そして人間の労力や頭脳や情感までが機械にとつてかわられてゐる時代であること、さらに人間が緻密に組まれた社会や組織の中に完全にくみこまれてしまつてゐる時代であること、又一面には、大衆化や、大衆化社会の状況がますます激しくなつてゐる時代であること、現代をこのようにみることにについては誰しも異存はないであらう。

× ×

教化をめぐつて、如上の現代が投げかけてゐる諸課題を具体的に考へてみよう。

科学技術の分秒をあらそうほどのさまざまな進歩は、人間の生活様式のみでなく、もの考え方にも大きく影響してくる。昨日よりも明日に関心をそいで生きるということになり、すべてのものがそれ自身の価値より、ただ時代

的に新しいか古いかという時間的価値によって評価決定されてしまう。こうした状況下では、歴史や伝統への顧慮が乏しくなり、世代間の隔絶がひどくなってくる。伝来の東洋的・日本的な生活や思想がその権威と拘束力を著しく喪失するにいたった原因もここにある。徳川封建社会には祖父の教訓を有難いものとして聴く孫の姿があった。社会生活の進展のテンポの遅さのために、生活経験の累積―年齢を加えること―は正しい人生洞察にとって貴重なものだった。しかし今日は祖父と孫と通じないのみか、親と子の間さえ隔絶してしまっている。今日では年齢を重ねて、可塑性を失ったらもはや時代からとり残されることを意味する。

こういう状況というものは、教団や教化にとって、非常に重要な問題をなげかけてきている。

数学の研究が、それ自身の固有の信仰の立場を純化しようとし、それによって論理的な精緻さを加えるということはいよとして、そのみにかかづらっているならば、肝心の信仰そのものは現実から遊離しきつたものとなる。そのとき、数学に支えられる教団の性格はきわめて封鎖的、保守的なものとなって、教化はもっぱら教団内へのみ向けられるであろうし、それも僅かに可塑性を失った老人のみが

その対象となろう。

われわれの教化の対象をひろく現代全体におこうとするならば、まづ社会規範や価値のめまぐるしい転換や流動をよくみ究め、現実根ざした宗教的要求の自由の根源から教義、信条を再把握するという努力を常住に怠ってはなるまい。

現代のテクノロジーは、高度の経済成長を可能ならしめ産業構造を変化させ、交通、情報機関のいちじるしい発達をもたらした。そしてそれは、人間の生活環境を大きくひろげたのみでなく、その移動をきわめてはげしいものにした。

昔の人々は一生かかって狭い一つの郷土社会に適應すればよかった。他の社会へ向っては融通が利かないけれども一つの社会には深く適應した明確な生活型というものが形成されていた。しかし現代人は、いわゆる外に開かれた社会に生きることを許さず、生活圏は拡大し、活動は狭い局地にとどまることを許さない。現代人は昔の人のように、生涯一つの生活環境に適應すればよいのではなく、次々と移り変わる環境にそれぞれ適應してゆかねばならず、幅広い柔軟性を持たねばならなくなった。いわゆる社会的可動性の激しさが現代社会の特色であり、現代人は自らこれにふ

さわしい生活態度を發達させている。しかも外に開かれた社会は無数の階層、職域、集団に分化しているのである。

われわれの教化も、この現代の外に開かれ、こまかく分化した社会の状況に即応しなければならぬ。この開かれた可動性社会に、一つの普遍的に有効な教化方法というものは、もはや抽象的なものに過ぎない。

閉鎖的な封建社会の狭い生活圏に定着した講組織や、可動性のない信者グループに依存して教団が経営されたり、それへ向って教化が行われるのみであっては、教団の現実遊離、教化の現実作用力の欠如はいよいよ深まるばかりである。

ここにも、先に述べた通り、教学や宗義が硬いドグマに陥入ることなく、幅広い柔軟性をもって、現実に対し進歩的な關係を持ち得るごとく再把握されねばならぬ所以がある。われわれの教化は、かかる可塑性をもった教学に裏づけられてこそ、無数に分化した現代社会の、階層、職域、集団のそれぞれに適応して、縦横に展開させることができるのである。

現代の状況の一つとして忘れられてならないのは、殊に我が国においてみられる現実と理想のギャップが非常に深刻であるということである。いつの時代にも理想と現実の

ギャップはあった。しかし今日のそれは、まことに甚しいものがある。われわれが、分化した集団、階層、職域に教化の手をのぼしたとき、ことに若い世代間になぎる理想と現実のギャップからくる焦燥感といったものにぶつつかるのである。大人はこうした矛盾に多少とも慣れており、妥協や諦めの道も心得ているが、理想主義的気分の横溢する青年は、矛盾やギャップにひどくいらだつのみである。

自由主義と家族主義、人格尊重と人間の商品化、合理性と人間不在、世界平和と核爆発、等々、あげて数うればきりが無い。

青年は一般的に良心的であり、非妥協的なので、この矛盾やギャップを一拳に解決しようとして、ヒステリックな革命運動に没頭したり、法や道徳を無視した軌道のない短絡行動に出てしまう。これを彼等の悪化、墮落とのみ見るのは重大な誤りであって、それよりも、戦後二十数年の新生活教育によって、彼等の中に本物になりつつある新しい生活態度に対する古い社会の側の受入れ体制が出来ていないためとみる方がより積極的な意味をもつであろう。

われわれの教化作用が古い体制側のモラルに依拠してしまつたならば、とうてい、この若い世代を納得首肯せしめることはできない。

この若い世代に向つて説かれる教説は、進歩的なスタン
ドに立つにしても、又は保守的な側によるにしても、とも
にこの日本の社会に累積する理想と現実のギャップをより
正しくつなぎ得るものでなければ、若い世代の実践的な宗
教理念にはならないであろう。

ここでも、教学の方法や姿勢が問われねばならない。教
学はあくまで現実と触れあったものでなければならぬ。教
化は常に現実の苦悩に接触するものでなければならぬ。
現代の問題として、いま一つ教化にとって重要な課題と
なるものがある。それは現代の宗教がどうしても通らなけ
ればならない関門としての無神論、反宗教論である。不可
知論や、合理主義、実証主義の思想にみられる消極的な無
神論はともかくとして、積極的、戦斗的に宗教や信仰を否
定し、攻撃する思想としての無神論との対決は、われわれ
の教化にとって重要な現代の課題である。現代の無神論と
して代表的なものがマルクス主義であることは云うまでも
ない。人間とその世界はすべて物質の運動にもとづくとい
う唯物弁証法の思想からして、マルクス主義が無神論であ
ることは必然である。マルクスは「ヘーゲル法哲学批判」
の序論で、「宗教的な苦しみは、一つには現実の苦しみの
表現であり、一つには現実の苦しみに対する抗議である。

宗教は悩めるもののため息、非情な世界の情であるとも
に、無精神の状態でもある。それは人民の阿片である」と
いって、積極的に宗教を否定している。

マルクス主義が科学であるかぎり、その宗教批判は客観
的意味においては、すべてその云う通りであろう。しかし
社会変革によって、すべての人間の不幸がとり除かれるで
あろうか。変革によって除かれるのは、人間の社会制度や
組織からくる害悪である。人間の主体の矛盾や不条理その
ものは、物質的、社会的処理によって解決されるものでは
ないであろう。人間の本質は歴史的、社会的である、だか
ら歴史的、社会的害悪を除けば、人間の不幸はなくなるこ
うだが、それだけでは楽天的過ぎる。飯の食いが彼の意
識を決定するというが、たしかに意識は時代や環境によつ
て変る。しかし、そういう色々な形態を現わして動いてゆ
く意識の働らきそのものは、形態にかかわりない。人間は
社会的、歴史的であるというのは、飯の食い方であつて、
飯を食うことに変化はない。食い方と食うとは不可分だと
いうのは食うという根本事実があるからである。この食う
という根本事実には矛盾や懷疑や不条理が生じた場合、社会
科学はこれをどうすることもできない。現代において宗教
が意味をもつのは、マルクス主義の意図する人間の客観的

条件の充実の問題ではなく、人間の主体的な矛盾、不条理など主体欠如に対応するものとしてである。要するに、宗教とは人間の実存の問題であり、実存の一つの在り方であるといえよう。

ともあれ、弁証法的唯物論と宗教の問題は、現代の教化にとつて、理論的にも実践的にも容易でない大きな課題を投げかけている。これは、まづ教学や信仰の立場が固められた上で考えられてよいというような教学、信仰にとつての周辺的な問題ではない。教学や信仰が、現代に成り立ち得るか否かにかかわる第一義的な問題として考えられねばならぬであろう。

現代の科学主義のもたらしたいま一つの問題は、これまで心の平安とか、人間としての幸福とかいうことがらは、まづ宗教や哲学の課題とされていたのであるが、それ等の課題の中へ、新しい心理学や心身医学が力強く入りこんできたということである。

現代人に眞の救いをもたらす神は、もはや単なる哲学的的冥想や原始的祈禱によってあらわれる神ではない。近時、急速に進歩してきた心身医学は、病は気からという諺を、心と体の結びつきについての生理学的研究や、心と病についての実証的研究によつて、これを科学的に裏づけてきて

いる。

われわれの教化の中に、悟りによる心の平安や、信仰による治病ということがあるが、これ等が科学の裏づけのない安易な精神主義に陥入らないために、われわれは現代の新しい心理学や心身医学を真剣に学ぶという姿勢をとらなければならぬ。身心一如の形における人間像を科学しようとしている心身医学は、将来、科学と宗教をつなぐ眞のかけ橋となつてゆくことを深く知らねばならぬ。

すでにアメリカでは、ウォルフとかメニンジャーという勝れた医学者によつて、「宗教と精神衛生アカデミー」なるものが結成され、定期的に医師といろいろな宗派の宗教家が集まつて、一諸に話し合う会が作られているというがわが国においても、九大の池見西次郎博士などは早くから、このような組織が作られることを待望していられた。心身医学的な研究の健全な発展に寄与するという立場から現代の教家は進んで医学的な知識を実地に習得してゆくべきであろう。

現代社会のもたらした自己疎外の状況、そこからかもし出される人間のさびしさ、孤独、不安、情緒不安定など、人生の方向をみ失つた多くの人々は、ノイローゼ的な何等かの体調不全を訴えている。今後、精神面よりする健康管

理の必要はますます昂まってゆく。このとき、われわれの教化は、現代人のこの悩みとも強くふれあって、すでに欧米にみられるような宗教家が病院内にオフィスを持って医師に協力するところまでゆかねばならぬであろう。

×
×

近時、布教の現場の要請にもとづいて、現代社会をみる視点を把握するための各種のゼミナーがしきりに持たれているが、このことはますます重要になってゆくであろう。要するに、現代の大衆社会状況における人間と宗教の問題を考察することなしに、いかなる有効な布教教化もあり得ないのである。

さらに、われわれの信仰が、純粹に根源的主体的なものであることから、その理解を一段発展させて、それを社会的共同的なものに連帯する力として把握してゆかねばならない。

真に現代と対決し、現代を変革するエネルギーとなり得たとき、われわれの教化は、初めてその有効性を保証されるのである。